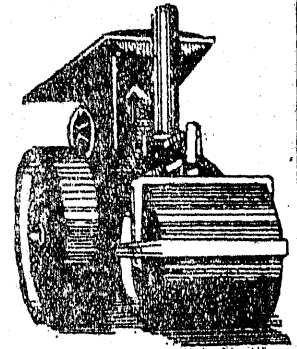


批判



道路の改良と婦人

久布白落實

最近の旅行をしてから、このかた、道路と云ふ事は、一つの念願となつて來ました、外國に於ける道路は、のぞいて見たが、我國の道路は一躰、ごうなつて居るのだらう、聞き度い！知り度い！と云ふ、願ひを持ちつつ、はや半年となつて仕舞ました、

道路と云ふ事に、始めて心が開かれたのは、約二十四五年前のことです、女子學院の寄宿舎で、いつも、晝食後に、階段下の、丸テーブルで、新聞を見る頃の事でした、何でも、國民の蘇峯氏が歐米漫遊の前後で、頻りに、道路改良と云ふ事をあの紙上に、

批判

歌つてあつた頃でした。

娘心になる程と思つて、興味深く読み、つゞいて青山の通りが、練兵場の端あたりから、ズット取擴げられて、今日の八間道路？になるのを、更らに深き興味を以つて、見守つて居ました。

然し、問題はこゝで終つて、全く意識の内の地下線となつて、今日まで埋つた姿になつて居ました。

二

女子學院の高等部を終へてから、両親のあとを追ふて渡米し、勉學、結婚等の十年をあの沿岸で過しました、其間には、ボストン行きの師の同伴者として、東部の重なる都市を一巡した事もあります、然し其頃は、米國自身も田舎は勿論、都市でも、改築やら、建て増しやらに忙殺され、あちらでも、こちらでも、道路が掘り返されて居る處が多かつたので、左程道路と云ふ事の方に心打たるゝ事なくすんで仕舞ひました。

三

は勿論、中心地のマーケット街から、眞直に、正面の山の頂まで、廻轉又、回轉して、自動車疾走して、毫も心配のない砥のやうな道路を築き上げてあります。

四

更らに驚く可きことは、桑港を中心として、北はシャトル市、南は羅府まで、千五百哩の間、何等途中妨ぐるものなき、アスファルト敷きの大道が、特に自動車の爲めにのみ造り上げられて居ます。これも亦最近十年以來の事です。

米國の自動車は、誰れも知つて居る通り、目下の處一千五十萬臺です。米國の人口が壹億〇五百萬人と云ふ事ですから、將さに十人に一臺づゝです、それがこの大平洋沿岸では、五人に一



半燒國の燒橋も、國風を襲つた。七十四人の士に幸ひ、名譽を全うし、高き雪も免れ、雪の囁も院向るす。

處が今度、歸朝後約十年を経て、歐米旅行に出で先づハワイに上陸して、一驚を喫しました、あそこは土ばかりの多い處で、私の參つた時などは、晝でも蚊が絶えない處でしたが、今度波止場を上つて、市中を見ると、ホノル、名物であつた、黒馬車クローリカーが一台もなく、荷馬車カウチが又一台もありません、見渡す限り、人でも荷物でも、皆自動車モーターが運んで居ます。従つて道路は、以前の凸凹の途は、見付けても無く、市中は勿論の事、ハワイの舊跡であり、又名所である、ヌアヌバリまで、十數哩の間、自動車がすれ違つても通れる程度で、全部アスファルト敷きで出来上つて居ました。

それから、十日の航海中は、道路の世話はありませんが、桑港に上陸しますと、あの市は、坂の多い丈けは前の通りですが、全市スツカリ面目を更めて仕舞ひました。

鐵骨コンクリートの大夏高樓が、天に聳びえて、全市を蔽ひ、一九〇六年の大火以來、古びず、煤けず、金門灣から、夕陽を浴びた、其姿を眺むればさながら盛装せる花嫁のやうです、そして其道路市中

臺、或ひは四人に一臺と云ふ程に多いのです、自動車は、シカゴまで行けば少し少なく、東海岸に行けば、更に少くなります、然して、其自動車が、少しく多く走れば僅かの時間でも八九十哩位は走りますから、道路の負擔は、可なり大きなものを見ねばなりません、それにもかゝらず、桑港でも羅府でも、前申した通りの、立派な道路です。そして其附近の、東京で云へば一寸と大森とでも云つたやうな處になると、其道路の立派さは、更らに優秀です、それは同じ金をかけても、市程に交通が激しくないからせう。

私は、十年振りに、米國を見て、今更らのやうに
スツカリ參つて仕舞ひました、それで、米國の道路
費を見ますと、千九百十六年と千九百十九年とに、
米國の國會では、各州の郵便道路を造る爲めに、二
億五千萬弗を決議し、之れを五ヶ年に別けて出した
として在ります、そして各州へ分配する時は、各州
でキット之れを最も少い處でも、倍にして使ふと云
ふのです、それ故、國會が、二億五千萬弗出せば、
最少限度でも五億弗にはなつて、道路に用ひられる
わけです。

あの大きな國ですから、五億弗と云つてもさう大
した事もありますまいが、然し、五億弗は我が十億
圓で、然かもそれがほんの各州間の郵便道路の爲め
で、つまり田舎途の爲めで、都市町村の大道路は含
まれて居らぬ譯ですから、可なりゆき届いたものが
出来ませう。

六

それから英國へゆきました、勿論倫敦が第一です、
然し其他の田舎の町村も數ヶ處見ました、英國は田

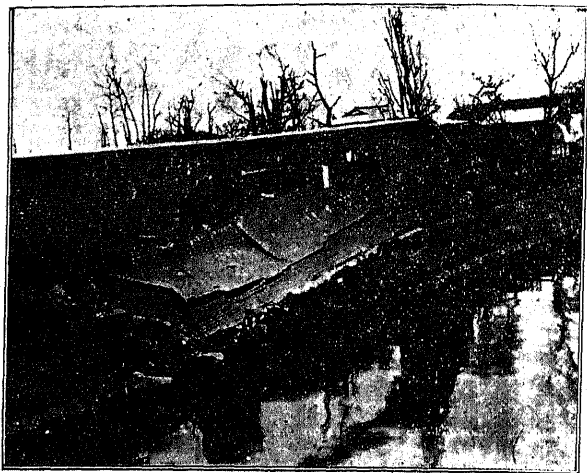
りました。

あの凱旋門を中心として、八方、十二方に、出て
居る大通り、並木と、人道と
車道と、道幅丈で、公園の
廣さもあろうと云ふサンセリ
ゼーの大通、路傍の石一つで
も、彫刻なしには置かぬと云
ふ、畫と彫刻の市、私は始め
て、「市を美化する」と云ふ言
葉の意味をこゝで、實物教授
されたやうに思ひました。

八

お話しが大分わき道へそれ
ましたが、それから、歐洲の、
小さい、古い國々の、和蘭、
白耳義、それからゼネバ湖畔
の、スキスのゼネバ市を尋ね
ました。

この三ヶ國は、いづれも國民の數は六百萬か七百



萬煉瓦の世に於ては、
橋の型も、多物落す
川に多物落す、或は
沿ひ且多物落す、或
は沿ひ且多物落す、
淺て盤も、舞見に
草軟も、影等、は
橋も、影等、は
至るなかな、影等、
間をなら、影等、
赤は、圖す、例

畑をあまり、せゝこましく造つて居ません、穀物は
多く外國や殖民地から仰いで、國內は成丈け、伸々
と、野原や、のんきな公園を廣く取つて、國全躰が、
大名やしきの感を與へます、こゝでは、米國の俄大
盡式の、道路は、餘り見掛けませぬが、多くは、ご
つしりとした、大きな角石で敷つめ何百年前から、
餘りへりもさせんと、云つたやうな調子の道路が、
多いやうに、見受けました。

七

佛國では、彼の英國との國境を爲して居るドーバ
ー海峡を渡つて、佛領に入つた時、波止場を出て首
府巴里にゆくまでの間に、汽車の窓から丁度見ゆる
處に、一條の田舎道が見えました、こゝは道路の土
が黒く、處々に水たまりが在りました、私は、東京
を出て以來、道路で感心のしつゞけでしたから、こ
れを見たので、やつと溜飲が下がつたやうな氣がし
ました、然しそれも僅かの間で、愈々巴里へつきま
したら、さすがはナポレオンの帝都丈けに、其井然
として、美と、意匠と堅牢さに、又つくづく感じ入

萬に過ぎませぬ、地圖で見ても、私共の弟位しか有
りませぬが、然し、大陸つゞきで、世界の文明國と

隣り合つて居るので、やは
り道路に申分は有りませ
ん、石か、アスファルトか、
何にしてもしつかりとして
居て、どうしても我々の國
の右に出て居ました。

九

獨逸を飛ばしましたが、
こゝも又かのベルリンに丁
度一月、雪や、雨の中に、
滞在しましたが、道路で困
る事は一度も有りませぬで
した、特に人道は、どんな
時でも立派です、家は下宿
やでも、旅館でも、箇人の
皆石か、煉瓦の四階建てと、
無茶に丈けの高い建築はあ

りません、ほんとうに全市が、軍隊式にモデルのやうに規律立つて見えます。

十

歐洲では、とても駄目だ、せめて、東洋に入つたらきつと、日本よりも劣つた道があるに違ひない、と、口には云ひませんが心持ちして、例の氣の長い、印度洋めぐりの船に乗りました、先づ第一に、スエズにつき、それから紅海を出切つて、印度の南端、セイロン島へつきました。

こゝでは歩いて居る人々は、半分裸躰で、白人の内に大部分土人が雜つて居ました、然し、土地は英領になつてから、早や百年近いので、道路は、やはり立派でした、勿論道幅は狭いですが、何處までいつても、立派にたゞき上げて在りました、そして、女までも出て、割石を運び、絶えず、道普請をして居ました、私共の一行は、思はずヤレ〜と互ひに目を見合せました。

十一

それから香港につきました、こゝはやはり英人の

經營です全市が山です、其山を縦横無盡に切り開いて、頂上まで大道をつけ、小路をつけ、同時に下水をつけ、中央には、吊上げ電車をつけ、今日まで、熱病の中心地で、住居とならなかつたと云ふ、熱帯以北僅かに、六度の、山許りの香港を、立派な港とし、又住居地として、造り上げて在ります。

聞く處によれば、我が攝政の宮殿下が、御外遊の際、特に、香港では、御案内の人々に、香港の道路を見せよ、と仰せられて、隈なく御覽になつたそうです。

この山地を、斯くまで、立派に築拓し上げるには餘程、年々費用を投ずる事とせうと、土地に委しい方にお尋ねしました、其方の答へに、年々の歳費の三分の一は土木費ですとの事でした。

私は我國の土木工事に働く、技師の方は勿論ですが、出来る事なら、受負の親分のやうな人等が、せめて香港までも、洋行して見たらよからうにと思ひました。

十二

愈々神戸に上陸し、それから汽車で歸京し、親しき東京の道路に見えました、石敷き、煉瓦敷き、アスファルト敷き、木煉瓦敷き、最も多きは、土のまゝ、小石を入れたもの、雨降れば水溜り、甚だしきは、田のやうな道、進歩の有ゆる階段を代表し、有ゆる進取の氣象を現はして居る道路！

これが、世界第六の都市、東洋の首腦を以つて任ずる我等の東京市の道路です、私は六ヶ月の世界旅行を終つて歸りついた時、いくら、ひいき目に見ても、これが自慢の東京市と思へませんでした、そして、つくづく、どうすれば、我國の道路が、せめて、雨が降つても、水の溜らぬ丈の道路にでもならぬかと考へ、今尙ほ考へて居ます。

十三

東京市の道路は、全躰で、二百五十萬坪との事です、然して、よい道は、一坪、五十圓から、七十圓位、かかるこの事です、又極くやすいのは、十五圓か二十圓でも、出来ると思はれました。

若しこれを仮りに坪五十圓と見て、平均して道路

を改築するとしたら、いくらかゝりませう、二百五十萬坪に、五十圓をかけて、丁度、一億二千五百萬圓あれば、東京市、全部の道路を改築出来る譯ですこれは我國の歳費の一割弱です、海陸軍縮少から出る全部にも當りますまい。

米國の郵便道路費の八分の一です、若し日本に、ロツクンエラーのやうな、金持ちが居て、其財産の一部を投じて、東京全市の道路改築に捧げたら、どんなに愉快でせう、この東京市全躰の道路を思ふ時に私は、一億二千五百萬圓位は少しも大きな金高と思へませぬ。

十四

然し、已でに改造された道路もありませんから全体改築するにも及びますまい、又東京市全体の歳費が、精々四五千萬圓であつて見れば、道路の爲めに用ひられる費用も、そう澤山ありますまいが、私共は、真から東京市の道路は勿論、日本全國の道路交通をして速かに面目を新たにしたいと思ふのであります。

十五

であります、それには澤山の費用を要します、然るに茲に今日今からでも出来る事柄があります、そしてそれが、大勢になれば、可なり大きな事になるやうです。

私共は郊外に住んで居ります、ここに池袋などは全く、池の袋で、數年前まではどの通りでも雨の日は沼のやうにならない處は、少いやうでした、然しこの頃では、せまい道では、少し通りよい處が出来て来ました、そして面白い事には、表通りに面した家は十圓、横町通りの家は八圓裏家等からは五圓とかづ、寄附して、自分等の前通り丈けでも簡單ながら工事をする事です、きつと外でもある事と思ひます。

又もつと手輕いになると、近處の風呂屋から、石炭がらを買つて来て、せつせとまく事です、これは僅かの事です、こんなに通行者の爲めになるかわかりませぬ。

明治維新前には町家で、朝夕道を掃き、水を撒い

この間チエツクスロバツクの國家がオースタリーから獨立して新しい一國となりました、其處から一九二一年に、萬國婦人參政權大會に、新國家を代表して數人の代表者が、出て來ました、其人々が喜びの腫を輝かして、報告致しますには

『私共は、男子も女子も、肩を雙へて、辛苦を擔ふて、終ひに、新國家を打ち立てた、こんな喜びはない。私共は勿論、男子も女子も平等の權利を持つて國政をやつて居る、新らしき共和國は、強き男子の手と共に、行き届いた、愛の婦人の手を要して居る、私共は、男女共に、手を携へて、我等が、産み出した、新らしき共和國を育て、居る、』と、私共が稱へる婦人の參政權は即ちこれです、男子の手に導かれて、今日まで育つて來た、我日本帝國は、實に、婦人の手を要して居ます、この道路などは、實に然りです。

十七

私はダラ／＼と、取りどめもない事を、すいぶん永くかきました、然しこの長談義を一言で纏めて見

て呉れたので道路が、餘程助かつて居た、然し近來では、交通が頻繁にもなり、又電車なども出來て、この道路を清めると云ふ良風が、すつかり痲痺して仕舞つた、どうぞ市民の方々が、道路を今少し愛護したら善いだらうと思ひます。

私が、キツト出來ると申しますのは此事です、即ち、道路を愛護する事です、私共婦人も今少し社會的理解を以て進まねばなりません。

十六

それで私は婦人の參政權と云ふ事について少し許り述べて見たいと思ひます、それは何であるか、云ひ代へると、婦人が、今日まで、自分の家、自分の庭、自分の子供と云ふ風に、自分のもの許り愛して居たものが、今度は村の家、村の庭、村の子供を、我が愛の内に入れる事です、つまりは、自分の庭丈けの世界が、道路まで擴がる譯です、公園まで擴がる譯です、學校まで擴がる譯です。

婦人が參政權を得ると云ふ事は、婦人の心を押し擴げて、家を抱くやうに、國家を抱かせる事です。

れば、我國全体の婦人が若し氣が付けば、道路のよくなる道理はないと云ふ事です。

着物の裾のよごれる事、下駄の費用、足袋の費用、靴の悪くなる事、時間の徒費される事、能力の減じる事、其他有ゆる不便や、不利が、一人々々の婦人の心にしつかり解つて來れば、道路の爲めに金を出す事は、惜しくなりませう、市會議員も府縣會議員も貴衆兩院議員も道路の豫算許りには、反對出來なくなりませう、また目覺た人は少しの祝儀、不祝儀の金でも包んで、道路費に献する篤志家も出て來ませう、こゝにいふ事は、實際、多數の人が考へると考へないに依る事です、私は、三萬哩の長道中の話をして、ズル／＼と、どう／＼話を、私共婦人の覺醒問題まで引き込んで仕舞ひましたが、實際に家と道！道と人！どうしても離すことの出來ぬものであります、而して我國の道路は世界の有ゆる文明國から比較にならぬ程遅れて居る。我が日本帝國を一步でも早く前進させやうとするのには、今日まで我國の潜勢力であつたところの婦人をして、この大綱の一端を引かせる外はないと思ひます。